

ねがいのいえニュース 第72号

社会福祉法人ねがいの杜 広報紙・2025年1月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0046 さいたま市西区宮前町812-2

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail info@negainoie.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



明けましておめでとうございます。晴天が続く毎日、みなさま、穏やかな新年をお迎えでしょうか。ねがいの杜は、インフルエンザ大流行の報道通り、年末から年始にかけて発熱者急増に見舞われましたが、大事に至ることもなく、まずまず平穏な年明けでした。また、コロナ禍から続いた赤字が解消し、経営の面でも徐々に穏やかな気持ちでいられる現在の日々が、いつまでも続いて欲しいと願ってやみません。

ねがいの杜2025年度の計画

強度行動障害と言われる方たちが多くを占める生活介護やじろべえは、開所以来15年間、テナント物件を使用してきましたが、支援員の苦難を考えた末、使い勝手のいい設計で新築し移転することになりました。1月24、25日、内覧会を行います。ショートステイも併設していますので、関心のある方はいらしてください。

6軒目となるグループホームみのりそうは、1月から着工し、10月オープンの予定です。2018年から始めたホームの新築整備も、これで目標の50人を達成し、一段落を迎えます。

また、現在運営中の保育園に隣接して児童発達支援を新築する計画が順調に進み、こちらも1月から工事開始、10月オープン予定です。発達障害児、行動障害児、重心児、等がみな一緒に過ごす現在の良さもありながら、狭いスペースの中で多動児には規制が増え、重心児、医ケア児には安全の見守りが厳重になっている不自由さがあります。新しい拠点では、フロアを分け、基準の倍の広さを確保し、誰もがゆったりと過ごすことができ、かつ、隣接する保育園との連携をスムーズに進められます。園庭は児童と保育園が共有し、交流保育、そして共生社会実現への歩みを進める、夢がいっぱいの拠点になります。

9月には、グループホームと児童発達支援のダブル内覧会を開催します。その際には、また、たくさんのお越しをお待ちしております。

クラウドファンディングにご協力をお願いします。

生活介護やじろべえは、知的障害、行動障害、の方たちが、畑や清掃など、屋外で体を動かす作業を主な活動としています。畑は地域の方から借りた土地を利用していますが、トイレがないため、

簡易トイレを設置しています。しかし、狭いうえに高い段差があり、障害のある人には使いづらく、しかも15年が経ち、衛生状態が悪化してきました。

そこで、車イスの方でも使用できる災害用トイレを畑に設置したいと考えています。水を使わずに薬剤で細菌を分解し、排泄物を自動的に梱包してくれるという優れたトイレです。

ふだんは生活介護の活動に使用し、非常災害時には、避難途中の地域住民にも利用していただこうと思っています。この災害用トイレ購入のために、みなさまのご協力をお願いします。準備中のサイトが整いましたら、別途お知らせいたします。



出会った支援者に責任がある

障害福祉界の中で、今、一番熱気があふれる医療的ケア児のネットワークの全国大会が、またひとつ12月に行われた。医療的ケア児等コーディネーター支援協会は、支援の中心的役割を担うコーディネーターの育成等に軸足を置くネットワークで、最前線で行動する方々が、経験から得た実践的なノウハウを教示する研修会に力を入れている。ことに、災害対応の行動力は、福祉関係者のみならず、災害大国日本の全国民が習うべき高みにいる方々である。

今回は、参加者ひとりひとりがこれからの未来を創る意識を持って欲しいという趣旨だったのか、午前も午後も、テーマ別分科会でグループワークが組まれていた。レスパイトについて考える部屋に参加してみると、主催者から「理想のレスパイトとは？」というタイトルが出題され、各グループで様々な意見、アイデアが出された。

「利用したい時にいつでも申し込むことができる」「楽しくてまた行きたくなる」

「兄弟がうらやむくらい楽しそう」「兄弟も一緒に泊まることできる」

そんな事業所が本当にあったらいいなあ、という熱気に包まれる中、それらのすべてを、ねがいのいえは22年前のオープン当初から実現していたことを思っていた。

障害福祉の意識が高いと目されている大阪の会員も、「ショートが足りない」「大阪もないと言ってる」と発言されていた。しかし、この日全国から集まってきた120人は、障害福祉界の精鋭と呼ばれる方たちである。

なぜ、この人たちがやらないのだろう。ないないと言ってる間に自分たちが始めてしまえばいいではないか、という思いがふつふつと湧くの止められなかった。世の中の全てを救うことはできない、知っている人だけでいい。自分の事業所に通ってくる方を責任もって24時間支援する、それを全ての事業所が決めたらいだけのはず、そう主張し訴え続けて、はや20年になる。

行動障害や医ケアの方が入れるグループホームもないと言われるが、日中の利用で慣れたスタッフに夜間も支えられ、ショートステイで泊りの体験を積んだ先にしか、重度の方が穏やかに暮らせるグループホームも増えるはずがない。しかし、障害者の地域福祉元年と言われた2003年から20年以上が経ち、それを目指した団体は希少な存在となってしまっている。児童から成人へ、そして生涯の暮らしの場へ、という「移行支援」の課題が今、あちこちで盛んに議論されているが、出会

った方へ生涯の支援を続けることを、事業者の責務とする制度が必要だったのではないか、と思えてならない。成長と共に必要な支援を創出することを当然のこととして実践してきたねがいの杜は、そもそも、「移行支援」を課題としていない。

それを全ての事業所に望むのが現実的でないことは理解している。しかし、全国に確実に存在する精鋭のみなさまには聴いて欲しい。日中通ってくる方たちを、夜間まで支えましょう。うちは昼間だけ、夜はどこか他の法人がやってくれるなどと、本気で信じられるでしょうか？それは自分たちがやるしかない、出会った支援者に責任があるのだ、そう思いませんか？

ここにいていいんだよ

4月から地域の認可保育園と併用で、ねがいの杜の児童発達支援ととっちゃんを利用しているマサキ君。初めての場所、初めてのスタッフ、入室しても落ち着くことができない。着席なんて無理。室内活動は、感覚遊びを数秒できるのみだったが、スタッフの指示に耳を傾けている様子は見受けられた。公園に行けば草を抜いて、その草を折る、指ではじく、葉っぱをちぎる、など、まるで草とだけ会話をしているようで、スタッフが話しかけても背を向けてしまう。

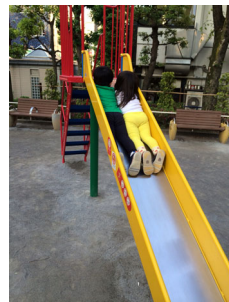
児童発達支援では、一人ひとりの発達段階を見極め、何に積み残しがあるのか、興味・関心・好奇心はどこにあるのか等、アセスメントしていく。手はつなげない。気持ちが揺らぐとスタッフの髪の毛を引っ張る、引っかくという感情表現をしてしまう。まだまだ触覚に頼っているが、その触覚から入る感覚もまっすぐに脳には伝わってはいない。いわゆる触覚防衛反応でこじらせてしまう。そんな姿が場面場面で見られるが、それでも公園では、滑り台やロッキングチェアを数秒できるようになっていった。

アセスメントに基づき、まずは初期感覚を育てるために、スタッフとのラポール形成を大切にしながら、ピーナツ型バランスボールとトランポリンを組み合わせたバルンポリン®を使用して平衡感覚へのアプローチを中心におこなった。特に眠い時はハンモックを激しく揺らし、情緒にもアプローチした。少しずつ目が合うようになり、クレーンで想いを伝えてくれる場面も出てきた。6月下旬から始めたプールは大好きで、水面に向かって背中からジャンプしたり、噴水と戯れたり、声を出して笑う姿が見られた。朝の会では、名前を呼ばれ返事をする時に、着席ができるまで成長した。

そんなある日。何か落ち着けない一週間だった。大好きなプールにも参加せず、泣きながら壁に向かって走っては、座り込む。声を掛けると、また泣いて壁に向かう。いつときもじっとしていられず、大好きなハンモックにも乗ってられない。保育園やとっちゃんでの様子には問題が見当たらず、もしかしたら家庭で何かあったのかもしれないと推測した。

ねがいの杜が日頃から大切にしている心のケアで、全身から伝わってくる不安や孤独感、やるせない気持ちに、身体に、張り合った。そのマサキくんの気持ちに寄り添い、“おとなごころ”を立てるお手伝いをしたいと思った。

仁藤 由美子



今だと判断し、身体から心の内を聞いてみることにした。泣いてハンモックで暴れているマサキ君の背中をハンモックの布越しに優しくさする。背中と私の掌の温もりが感じられたとき、優しく話しかけた。

「なにか不安なことがあるの？」いやいやと暴れていた動きが一瞬止まる。

「おうちでなにか心配なことがあるの？」

耳を傾けていることがわかる。もしかしたらお母様が懐妊かもとの話もあったので、具合が悪いのかなと想像する。

「そっかあ、おうちでなにかあったんだね」「それは不安だし怖かったね」

ハンモックを揺らしながらマサキ君の身体の動きを感じる。泣き方が変わる。

「人生を生きていくと、家族が増えたり減ったりと、たくさんのことがあるんだよ。もしかしたら、お母さんの具合が悪いの？」

マサキ君の泣き声が一瞬止まる。近いのかもしれないと話を続ける。

「大丈夫だよ。でも今は辛いね。わからないからマサキ君も辛いね。でもさ、どんなことがあってもマサキ君はお父さんとお母さんの子どもだからね。捨てられることも、愛されないなんてこともないよ。そこは一生変わらない。もしかしたら、赤ちゃんが来て少しの時間はマサキ君に向き合えない時間もあるよ。それは君が生まれた時もそうだし、みんなも経験していることなんだよ。」

私の話を聞き入っているのが身体から伝わってくる。

年齢が低いからわからない、発達に遅れがあるからわからないだろう、と思ってしまう大人は多い。しかし、彼らにも尊重すべき想いと人権がある。言葉の表出がないのはわからないことではない。伝え方に工夫があれば、十分伝わっていると感じられる。話を続けながら、ハンモックの揺れに身体をゆだね、気持ちが落ち着いてきたのがわかる。

心のケアをおこなう際に言葉をかけない方がいい時があるが、今回の場合は、マサキ君の気持ちを代弁する言葉と、不安に対する答えが欲しいだろうと思い、たくさん言葉をかけた。それも身体の張り合いを通して伝わってきたことだ。

マサキ君の顔が徐々に明るくなってゆくを感じながら、話を続けた。

「マサキ君を愛している人はたくさんいるよ。保育園の先生、そして私たちもだよ。でも一番マサキ君を愛しているのは、ご家族、そう、お母さんとお父さんだよ。だから、不安でも、家族と一緒に家にいていいんだよ。マサキ君のいたいところにいていいんだよ。」

あんなに泣きじゃくっていたマサキ君が落ち着き、ハンモックの揺れを楽しみだしたところで私は離れた。その後、0歳の利用児の顔をのぞいたり、触れたりしていた。昼食も笑顔で完食し、少しお兄さんの顔になったマサキ君が再び私のところに来て、手を取り、笑顔で顔を覗き込んできた。

私の答えは「合ってたよ」

「ありがとう、ぼくはここにいていいんだね」と言っているようだった。

